

沖繩の生活



津 守 真

此の夏、私は琉球大学派遣講師の一人として沖繩にゆく機会を得た。これは教員の現職教育のための夏期講座で、昭和二十八年より実施されている計画で、本年は四年目である。沖繩を訪れた人々が感銘をうけて帰ってくるように、私もまた沖繩を訪れる前に想像していた以上に感動させられたので、その印象などをとりまとめて記してみようと思う。沖繩の印象や、その教育問題については、すでに本誌の第五十巻十二号（昭和二十六年）に牛島義友氏が記され、第五十四巻一号（昭和三十年）には松村康平氏が、第五十五巻一号及び二号（昭和三十一年）には村山貞雄氏が、第五十五巻八号（昭和三十一年）には戸倉ハル氏がそれぞれ詳しく記しておられる。

沖繩本島は大きく三つの地域に分けてみる事ができる。すなわち、北部（くにがみ国頭とよばれる）と中部（なかま中頭）と南部（しど島尻）とであり、それぞれ風物も異なり、社会事情も異にしている。北部は樹木が茂り、風景など本土のいなかに似ているが、南部は戦争のために大きな樹木など未だにほとんど見られない。近頃本土の新聞でもしきりに報道されていた基地の問題が最も身近な体験となっているのは中部である。戦争前までは中部は寂しい農村だったそうであるが、現在では商店街が中部にうつった観があり、基地及びそれを取りまく商業を中心とした市がいくつもある。場所によっては、道路の両側が赤や青のベンキをぬった四角い家が立ち並んで、横文字の広告ばかりのところがある。こんな道筋に入りこむと、これでも沖繩に来たのだろうかかと錯覚を起してしまう。私は沖繩滞在の六週間を南部地方で過ごしたので、始めて中部に来たときには驚いたので

ある。南部の地方はもともと農業と漁業を主とし、首里と那覇（中部と南部との境界にある）とを含めて沖繩人口の半分以上を占めている。島の面積や人口は、本土の福井県や鳥取県と同じくらいで、本島だけで一、五〇〇万、人口六十七万余の小さな島である。日本の一番南の小さな島なので、忘れられがちになるのである。

始めてこの南の島に足を踏んだとき、まず感じたのは地の底から吹き上げてくるような熱気であった。沖繩でも三十年來の暑さと古老も云われた真夏のせいだったかもしれないが、日を過ぎすにつれて暑さは加わり、八月下旬に台風がくるまでは、全く暑さの苦しみであった。常夏の国などとロマンチックなことをいうのは、寒いときということ、暑さとの闘い、自然の気候との闘いが、日夜展開されているような観がある。子どもたちにとって、何が苦痛になっているかと調べてみても、暑いのが苦痛であると答えるものが相当みられるのは、本土ではみられないことである。また、夏になると、野菜がほとんどなくなるので、これも大変なことである。ことに、まるで海から海へ吹きぬけるような、すさまじい台風が三日二晩も吹きつづけたあとは、野菜が全くなくなってしまう。小さな子どもや、妊婦にとっては、栄養学上、大きな問題であろう。

気候風土が住む人々にとって、苦痛になっているだけでなく、積極的な楽しみも少ないように思われた。風光明媚で、青い海と空は南国特有の美しい色に輝いているが、小さな島のことなので、旅行をしたりハイキングに出かけたりということもない。温泉があるわけ

でもない。またたとえ温泉があったにしても、一般の生活はそれを楽しむ余裕もない。天然も産業も殆どないこの土地では、人々は毎日の生活に追われ、生活の楽しみを求めぬゆとりがないのである。

それに加えて、この島独特の政治問題は、人々の表情を一層暗くしている。歴史をみても、昔から支那に冊封使を送り、又、北は薩摩藩の圧迫をうけて、二つの勢力に首物を献じなければならなかった運命は、今に至るまで続いている。台風もこの地のあたりで方向を軽ずるのが常であり、気象学上も重要な位置を占めているというが、沖繩のもつ地理的な宿命によって、常に強いものに踏みこじられ、その土地に住むものは一番損をするという結果になっているのである。このような歴史に培われたためであろうか、沖繩の人は忍従の心が強い。

こうした土地に数日を過す中に、私は青年の表情が大層暗いことに気がついた。学校でゆきかい、街ですれ違ふ高校生も、何か暗い感じを受けるのである。この若い人たちは将来に希望がないかのようにみえる。恐らく東京の大学に行くことが、最大の希望であるようである。しかしその数はきわめて限られている。就職を考へても、単作業にゆくのが一番安定した働き口であるようだ。単作業とは、アメリカ軍の基地で働らくことである。現在軍務に従事するものは、就業者数の約二〇パーセントを占めている。そして一般に就職の道はだんだん狭き門となってきた。国際的な政治問題が生活の中にまで入りこみ、外を眺めても、内を省みても、暗い問題ばかりである。しかも生活は極めてゆとりがないので、青年の

表情が暗くなるのも無理はない（しかし太陽族や暴力教室のようなことは全く考えられないのがこの青年の特徴である）。

沖繩の表情は昔から決して明るくはなかった。しかし戦前までは首里を中心とした文化が栄えて生活にうるおいを与えていたと古老はいう。優雅な曲線をもった美しい瓦葺の官廷建築、家々をとりまく石垣も道の両側に立ち並ぶと、町に一種の重厚感を与える。その間から蛇皮線の曲に合わせ、古い琉球相聞歌が響いたのであろう、その沖繩の姿を臉に画いて首里を訪れても、今はその姿は何処にもない。首里城には日本軍の司令部がおかれ、戦開はこの地で激烈をきわめたのである。丘の上の首里城の趾に建てられた琉球大学の屋上に立って、あの丘、この谷と指をさされながら、沖繩訪問第一日にきいた話はこの地の戦闘であった。文字通り山容あらたまつたこの古い土地には、石垣の一片さえも見つけることは困難である。その激しかった戦争は未だに生々しく土地に刻みつけられているのみでなく、人々の生活の中にまで癒し難い傷となつて残っており、それが生活を暗くしている大きな根源ともなつていたのである。すなわち戦争による家族の喪失は戦禍の最大のものであった。沖繩の人々で家族の誰かを戦争で失わないものは殆どいないといつてもよいくらいなのである。

学校を訪れてみる。話をきいて驚ろくのは、大がいの学校で、小学校の五・六年生は、他の学年の三分の一の人数である。五年以下が、一学年六学級とすれば、五年六年は、二学級ずつである。つまり、戦争のときに、乳呑子を背負つて逃げて、そのまま爆弾でや

れた場合もあるし、極度の食糧不足で赤ん坊にやる乳もなく、栄養失調で死んだ子どもも多いという。ともかく、結果としては、その頃乳児で現在まで生きのびているものは、極めて少ないのである。

それから小学校高学年と中学校では、クラスの約三分の一以上が、父親のいない子どもたちである。もちろん沖繩戦で死んだものが大部分である。父親のいない子どもが多いので、子どもたち自らそのことを何ら不思議に感じていない。むしろ父親がいないのが当たり前なくらいである。もう少し年令が高くなつて、二十歳台になると、彼ら自身が戦争の参加者である。当時の中学生、女学生、師範生は、大がいの同級生の半分以上を戦争で失なつてゐる。その人々が現在二十歳台の後半の人々であり、ひめゆり隊や健児隊で生き残つた人たちで、若手の教員として活躍しているものも多い。講習の受講生の中にも、沖繩戦と直接経験された方々が沢山おられ、それらの方々の話をきくにつけても、胸のいたい思いをしたのであった。たまたま私の滞在していた町が、前半は与那原、後半は糸満で、沖繩戦の行なわれた土地であった。敵前上陸をした米軍と、首里、那覇で、最後の抵抗を試みた日本軍がここで敗れて後、南部の方に後退していった。そのとき、一般住民も、家財を悉くすて、南へと落ちていった。そして沖繩最南端の、喜屋武の岬、摩文仁の岬まで追いつめられて、あとは海へ逃れるより他ないところまでいって、十数万の住民、兵隊が艦砲に倒れたのであった。沖繩戦で夫をなくされた方、息子、娘を亡くされた方に、何処でと尋ねると、きつと摩文仁の辺でと答えられる。誰も何処でとはつきりい

る人はいない。そばにいてそれを知っていた人は、またどこかで死んでしまったからである。だから戦後、文字通り死屍塚々として積まれていた骨をかたずけるにも、ほとんど名前も分らぬままに慰霊塔に祀ったのであった。多くの人に知られているひめゆりの塔、島守の塔などの他に、どの部落にいつても慰霊塔に行きあたるのである。そしてその何れも、ここに何千体を祀る。ここに何万体を祀ると記されている。あるとき、私の訪れた南風原には陸軍の野戦病院の跡があった。それは丘の中腹に縦横に掘った壕だったが、その入口は今は落盤のためにふさがれて、そこにはまだ二千体以上が戦後十年の今日なお掘り出されずにそのままになっているとのことであった。ここはひめゆり隊の活躍した任地であり、日本軍が更に南下するときに、重傷患者三千人が処置されたのであった。これは南風原の村役場の方の話である。

沖繩でこれ程の犠牲を払って戦ったいくさは、一体何のためだったのだろうか。何故一般住民までもが、少年少女までもがこんな犠牲を払わねばならなかったのだろうか。私はいろいろの機会にこのことを尋ねてみた。もちろんこれは何処にもある戦争そのものの犠牲である。しかし沖繩の場合、それは日本の教育の犠牲でもあった。皇国のために身を殉ずるといつ一つの教えにしたがって、純真な青少年学徒は、積極的に戦に参加し、最後まで投降せず、あるものは自決したのであった。もしも生徒が自分自身で判断して行動するようにふだんからしむけられていたならばもっと少ない犠牲ですんだのではなかるか。上の人のいうことにすべてを託し、自分

の生命をすら託したことが犠牲を更に大きくしている。これが教育の観点からみたときの一つの結論である。

糸満の町から眺められるところに、慶良間列島という島があり、その中に渡嘉敷島という島がある。この島は、沖繩で一番最初に敵前上陸した島であった。その島には頭を傷のある子や、頭がいびつになった子どもがいるそうである。それは、ここに敵前上陸されたときに、住民は家族を殺しあって玉砕したとのことで、そのとき殺されかけて生きかえったのが頭のいびつな子どもなのである。もしもここにもう少し違った教育がされていたら、あるいはすぐれた指導者がいたら、このような悲劇は起らなかったろう。父母をなくし、また肉親の手によって殺されそこね、また、今は多くの人々から忘れられてしまったこの頭のいびつな子どもに、私は沖繩のすがたを見るような気がするのである。

沖繩の教育の問題は、こうしたいろいろの事情の中に生れてくる。

沖繩の人は素直で、人を信じやすい。それだから戦争の教訓に鑑みても、ひとりひとりの自立的な判断に基づいて行動するように教育をすることが教育の大切な課題だと考える人も多い。ところが、実際には沖繩の学校では教室での子どもの発言が少ないようである。それは教室での教師の技術によることもあるが、それよりもっと、社会全般の風潮でもある。方言のことわざに「わらべがさしはんき」という言葉がある。これは、童はだまっっている方がよい、という意味で、子どもはとやかく口をきくなという戒めのことばであ

る。だから、他府県から来た子どもが、活潑に発言して積極的に行動すると、「いばやし」であるとか（威張ってやがるの意）ふみだらぐわー（ほめられたい人）とかいわれて、人からきらわれたり、眉をひそめられたりする。ことに女の子の場合にそれが強い。こうした封建的な人間はこの社会でもなかなか抜きがたいもののようにある。

一般庶民の苦しい生活につながる問題として、子どもの労働の問題も見逃せない。子どもがつらく思うこと、苦しいこととして挙げていることの中で、労働は大きな部分を占めている。労働は主として水汲み、草刈り、糖黍刈り、子守り、洗たく等がある。水利の悪い部落が多いので、泉から数町も離れた所では、子どもの手をかりなければならぬのも無理はない。洗たくは、一般にきわめてよくやるのであるが、女の子は八歳ぐらいにもなると、川端、井戸端に腰をおろしていくつも洗濯をしているのをよく見かけたところである。遊びながら子守りをするのは極めて一般的な現象である。こういう労働がしばしば過重なほどになるのであろうか、子どもは日曜や、冬休み夏休みを嫌う傾向がある。苦しい生活の中で、子どもに手伝ってもらうのは大切なことでもあるが、それとともに子どもの日常生活、家庭生活に楽しみと、うるおいとを与える必要のあることもいろいろの方々と話し合ったところであった。このような面で、家庭生活上改善すべき点が多い。

男女共学の問題も本土と異った様子を呈している。それは、しみ

せずという雰囲気育てられる。ある学校でね、小学生に二人ずつ手をつなぐようにいったところが、足の下をくるくるとみまわして、木片を拾って、その両端をもって歩いたという。

教育上の問題については、なお多くの問題があるが、紙数もつきたので割愛しよう。幼児教育のことに触れなかったが、この点は本年の一、二月号の本誌に村山貞雄氏が詳細に記しておられるので、それ以上付け加えることもない。ただ、現在沖繩では、小学校以上の教育は、政府も一般も力ももれているのに比して、幼児教育は注意を払われていない状態であった。最後に、沖繩の先生方からくれぐれも頼まれたことであるので特に記しておかなければならないことは、日本復帰の切なる願いである。直ちに解決することのできないいろいろの問題があることを十分に承知しながらも、住民の心のうちにいつもこの願いが燃えているのを察することができた。沖繩の人は昔から忍従になれているので、興奮して叫ぶことをしない。いつもこんなに損な目に会わされながらも、もっとはっきりと主張してもよさそうなものだと思ふこともあった。今後、沖繩の人々がたとえその願いを表面に出すことがなくなっても、それは「守礼の邦」沖繩の民の忍従心によって内に籠められてしまったのだと思うだろう。お世話になった方々の顔を思い浮べながら、思ったことを書き記した次第である。（筆者はお茶の水大助教授）